

滋賀県社会福祉学会40回特別企画



# 実践・研究から学ぶ 福祉の価値



滋賀県社会福祉学会  
(事務局/滋賀の縁創造実践センター 社会福祉法人滋賀県社会福祉協議会)

2022年2月発行



## はじめに

昭和58年よりスタートし、本年度、第40回を迎える滋賀県社会福祉学会。

本学会は、実行委員・推進委員をはじめ、研究発表者やシンポジウム登壇者など様々な分野から参画いただきながら、滋賀ならではの社会福祉の実践や不断(普段)の研究を共有し学び続ける場として創り上げてきました。

本年度は、「40回 特別企画」として、これまで本学会に携わった“人”にスポットをあて、福祉の実践・研究に対する思いや意義、そこから見えてきた福祉の価値等について、それぞれの角度・視点からのメッセージなど寄稿いただき、誰もが暮らしやすい未来への1歩へつなげていく1つのきっかけとして冊子を作成しました。

今回は21名の方々に、本学会での思い出や日々の活動のなかでの思い・意義などをご寄稿頂きましたので、皆さまぜひご一読ください。

滋賀県社会福祉学会

# 目次

(敬称略・五十音順)

## ●はじめに

## ●メッセージ

猪飼 理恵 (彦根プレーパークの会) .....	p1
太田 正則 ((社福)椎の木会 落穂寮) .....	p2
大谷 喜久 ((社福)甲賀市社会福祉協議会) .....	p3
大槻 敏明 ((社福)さわらび福祉会 さわらび作業所) .....	p4
岸本 弘己 (鹿跳倶楽部) .....	p5
北出 篤嗣 ((社福)さわらび福祉会 奏-かなで-) .....	p6
口村 淳 (岡山県立大学 保健福祉学部) .....	p7
小金澤 一美 ((医)白櫻会 小金沢歯科診療所) .....	p8
堺 稔 ((社福)甲賀学園 鹿深の家) .....	p9
坂本 彩 (彩社会福祉士事務所) .....	p10
摺本 圭治 (NPO法人 地域で創る土曜日夢の学習) .....	p11
坪川 拓己 ((社福)甲南会 特別養護老人ホームせせらぎ苑) .....	p12
中島 円実 (滋賀県地域養護推進協議会/滋賀県SSW) .....	p13
中瀬 隆泰 (NPO法人 宅老所心) .....	p14
西崎 清隆 ((社福)青祥会 長浜メディケアセンター) .....	p15
春田 真樹 (滋賀県児童福祉入所施設協議会) .....	p16
日比 晴久 ((社福)幸寿会 カーサ月の輪) .....	p17
藤方 公 (合同会社『World of Wing』) .....	p18
安田 誠人 (大谷大学 教育学部) .....	p19
山口 浩次 ((社福)大津市社会福祉協議会) .....	p20
竜王 真紀 (山内エコクラブ/甲賀市役所) .....	p21

## ●おわりに

## 20年続く「彦根プレーパークの会」

### 彦根プレーパークの会

### 猪飼 理恵

彦根市の子育て支援 すくすく教室、のびのび教室のお手伝いをされていた中村信子先生が、かねてより冒険遊び場に関心を持っておられた有志の方々と一緒に、中村先生の私有地をお借りして2000年に彦根市野田山町に滋賀県で初めての冒険遊び場「彦根プレーパーク」が始まりました。

同じ学区内で3人の子育てをしていた当時の私は、すくすく、のびのび教室の延長でプレーパークにも参加させていただくようになり、山と崖と竹藪しかない広場で「けがと弁当は自分持ち」を合言葉に、自然の中で子どもたちが伸び伸びと遊ぶ姿を見守り、一緒に参加する保護者の方々や、プレリーダーや安全指導員の方々と一緒に楽しいひと時を過ごさせていただきました。

私が代表をさせていただいているときに10周年を迎え、ちょうどその年に福祉学会でプレーパークの会の活動を発表させていただき奨励賞を受賞させていただきました。

その後私の子どもはプレーパークを卒業させていただき、会の代表も後任の方に引き継いでいただきました。その後も活動は続けて頂き、昨年彦根プレーパークの会は20周年を迎えました。大きく成長し成人となった当時の子どもたちや、年齢を重ねた親たちが同窓会のように集まり、現在参加して

いる子ども達や保護者と一緒に懐かしく参加させていただきました。

今は情報機器の発達で人とのつながり方や子どもたちの遊び方は大きく変化しました。ポータブルのゲーム機やインターネット上でのつながりができるようになり、人と人とのつながりもオンラインになっています。特にコロナウイルス感染症の影響で、おとなの世界でも会議や研修がオンラインになり便利になった側面もあります。しかしこれはあくまでも社会性のベースがあるうえでの利便性であると思います。子どもたちが遊びを通して学ぶ力は、バーチャルやオンラインでは身につかないものがあるのではないかと危惧しています。

「けがと弁当は自分持ち」のプレーパークは、自然の中で五感を使って興味関心を持って遊びを考え、異年齢の人との直接のかかわりの中で、人につながる術を感じ取っていたのではないのでしょうか。プレーパークでの活動は子どもたちの育ちに大切なことを教えてもらってきたと思います。

ここまで活動が続けられてきたのは中村先生をはじめとする支えてきていただいた皆様のおかげです。ありがとうございました。

#### ●学会との縁

プレーパークの活動を「福祉」と考えたことはありませんでしたが、主人のアドバイスで10周年を迎えた活動を福祉学会で報告し、奨励賞をいただきました。



#### ●プロフィール

昔はTHE ALFEEを追っかけ、今は娘と一緒に嵐のファンクラブ会員(休止中だけど)の3人の子どもの母親。

仕事では保育士としてこども園で子どもたちと日々走り回っています。

## 滋賀県社会福祉学会に関わって感じたこと

滋賀県児童成人福祉施設協議会 副会長/社会福祉法人椎の木会 落穂寮 施設長 太田 正則

私が入職した落穂寮は1950年に近江学園から最初に枝分かれした児童入所施設でした。当然糸賀先生の教えを新人研修で学び、近江学園職員三条件の「四六時中勤務、耐乏の生活、不断の研究」は、落穂寮でも引き継がれていました。この中で最も意識しないと取り組めなかったのが「不断の研究」でした。それは、当たり前になっていく日常生活の中で、一人ひとりの発達に注目しながら観察し、発達保障の観点から課題を見出して仮説を立て、取り組む過程を記録に残し、そこから見えてくる結果を検証し考察することの繰り返しが必要だったからです。しかし、当時こそ対象利用者さんの年齢は幼児から30歳代でしたが、現在では幼児から高齢者まで。もちろん育てこられた生育環境や知的レベル、障害特性も様々です。そして関わる職員の人生観や価値観、教育レベルもまた様々だった為、観察の視点や記録の取り方を学んでもらいながら職員間での統一を図ることから取り組む必要がありました。

そのような中での24時間365日の生活を共にしながら、四六時中勤務から8時間の交代勤務と変わっていった労働環境の改善が、生活施設での「不断の研究」を更に複雑な過程を経なければエビデンスを保つ事ができない取り組みにしているのではないかと思います。と、これまで当

法人として学会の発表に至るものが出せていないことに言い訳をしているだけなのです。

そんな私が滋賀県社会福祉学会に関わるようになって感じたことは、当事業所として取り組んできたこれまで一人ひとりに特化したコアな事例研究ではなく、学会の研究発表を広く多くの方に聞いていただく事で「福祉の思想」を価値観として広め、「滋賀ならではの福祉」が育てられてきたのではないかということです。

長く生活施設に身を置くものとしての糸賀福祉の思想、それは「自覚者が責任者」であり、その「自覚者」であるために、支援者が「意識した課題」の中での関わりが、利用者さんにとって流れていく安定した日常生活に繋がっていくのだということを忘れてはいけない、と再確認させていただけたことでした。ありがとうございました。そして、これからも学会のますますのご発展を祈念しております。

### ●学会との縁

現場職員として従事していた時は現場一筋だったこともあり社会福祉学会に参加させていただくことは殆どなく、落穂寮施設長に就任したことで滋賀県児童成人福祉施設協議会理事となり、滋賀県社会福祉学会推進委員の任につく事となりました。

第36回から、お役に立てているかはいささか不安なところでありますが、座長を務めさせていただいております。



### ●プロフィール

1986年4月、社会福祉法人椎の木会に入職し、重度知的障がい児・者の生活活動支援に携わって35年。

現在は障害者支援施設落穂寮の施設長と居宅介護事業所・相談支援事業所・共同生活援助事業所の管理者を兼務

## 失敗できる勇気

社会福祉法人甲賀市社会福祉協議会

大谷 喜久

社会福祉協議会は地域の困りごとを地域の住民と解決に向けて話し合い、共に実践を重ねながら住みよい地域を作ることを活動の柱としています。地域の困りごとや地域で取り組む福祉活動は、その時の暮らしの様子と共に移り変わっており、制度やサービスでは対応できないことに対して様々なアイデアを出し合い、新しい取り組みにチャレンジしていくことが求められます。

今まで滋賀県社会福祉学会で発表した内容として、希薄化が叫ばれる地域の現状に、個人の死と向き合うことで改めて繋がり大切さに気づくためのツールとして“エンディングノート”を用いた地域作りや、高齢化が進む地域の中で、認知症になっても安心して暮らし続けられるように地域のみんなで認知症サポーター養成講座を受け、福祉施設・事業所と共に配役を決めて行った“認知症徘徊模擬訓練”、コロナ禍で生活に困窮された方や子ども食堂など地域の福祉活動を応援するため、ボランティアが中心となって運営をスタートした“フードバンク活動”などがあります。どの取り組みも、今まで地域に無かったものであり、地域の住民と共に作り上げる過程で活動を育てながら地域の住民同士が繋がっていく様子を間近で経験させていただくことができました。しかし、様々な取り組みの中には失敗も沢山ありました。

滋賀県の福祉を築いた一人(※1)である元滋賀県社会福祉協議会事務局長の長尾寿賀夫氏は、1963年(昭和38

年)の事務局長就任当初に社会福祉協議会職員の活動や態度の目安になるものと考えて「社協活動十則」を作成されています。その一つに「社協活動は創造が大切であり、自由が大切である(タブーのある組織は硬直する)。そのためにはある種の雑然さに寛容であることが必要である(※2 下線は筆者)」と示されています。長尾氏が指摘されるように、地域に無い新たな活動や仕組みを作る中では失敗することもあり、そのチャレンジを支える土壌づくりこそが地域福祉の推進力となるのではないのでしょうか。

滋賀県社会福祉学会では、毎回、滋賀県内の様々な福祉分野から新しいチャレンジが発表され、手強い質問とともに激励の声が送られます。私達には滋賀の福祉の仲間や滋賀県社会福祉学会という土壌があり、これからの時代に必要なチャレンジができると思います。きっと私達の果敢なチャレンジに「失敗してもまあええか、ぼちぼちいこか(※3)」と、滋賀の福祉の先人の声が聞こえてきますよ。

※1 『みんなちがってみな同じー社会福祉の礎を築いた人たちー』 滋賀県社会福祉協議会発行より引用

※2 『社会福祉協議会創設とあゆみ～4人の事務局長経験者の語りから～』 日本地域福祉学会発行より引用

※3 『「聴く」が「効く」熊澤孝久物語』 熊やんプロジェクト発行より引用

### ●学会との縁

滋賀県社会福祉学会での研究発表内容(共同研究含む)

- ・平成24年度「エンディングノートを活用した地域福祉活動のすすめ」(奨励賞受賞)
- ・平成25年度「地域の先輩に学ぶ、広報誌・町史を用いた福祉教育の実践」
- ・平成26年度「スペシャルオリンピックスからつながるオーダーメイドの福祉教育づくり」
- ・平成28年度「見守り支え合いの地域づくり～認知症徘徊模擬訓練を通して～」
- ・平成29年度「イノベーションサロンの作り方～甲賀圏域で取り組む職種を越えた協働の基盤づくり～」(奨励賞受賞)
- ・令和元年度「地域福祉と共同募金改革～ご近所福祉ルネッサンス～」(奨励賞受賞)
- ・令和2年度「フードバンク事業eこころステーションの挑戦～ボランティアによる参加のプラットフォームづくり～」

### ●プロフィール

甲賀市社会福祉協議会で主に地域支援を担当。滋賀県社会福祉学会へは自己研鑽の場、仲間づくりの場として参加。



## 40年なんやあ

社会福祉法人さわらび福祉会 さわらび作業所・第二さわらび作業所 施設長 大槻 敏明

滋賀県社会福祉協議会70周年、福祉学会がはじまって40年ということで、思い返せば、私自身しがらき会に勤めたのが昭和58年なので福祉学会がはじまったのと同じ年だったようです。そんな中で福祉学会というより、「社会福祉協議会」の方々には早くからお世話になっていた印象があります。町の社協さんはいつでもだれでも気楽に行けてお茶を飲めるところ、お茶を飲みながらいろんな行事や事業のヒントをいただけるという印象がありましたし、県社協さんは、「あそこに行けばいろんなものを貸してもらえる。」今でも貸し出しはあるのかもしれませんが、当時もっとも画期的だったのが、「ビデオ編集機」でした。16ミリ映写機も貸し出しておられ、映画上映ができると聞いていましたが、これには資格がいるということで借りたことはありません。「ビデオ編集機」は高額で施設で買ってもらえるわけでもなく、でも当時流行りだしたビデオを編集したいというおもいで県社協さんにむかい快く貸していただきました。そんなこともあって、県庁の近くにあったときはちよくちよく通わせていただきました。

本題の「福祉学会」ですが、その頃は毎年送られてくる近江学園さんの年報のすごさにずっと驚かされていました。確か5年に一回はめちやくちや分厚い報告書だったと思います。そういえば、福祉学会の発表も、近江学園さんが何

組も出ておられた印象でした。これは糸賀先生からの流れだと先輩にお聞きした記憶がありますが、残念ながら自分自身福祉学会に出て発表したのは、いつごろかも忘れてしまいましたが、「甲賀郡サービス調整会議」からの報告の中で、2～3分就労について話をさせていただき、ネタを仕込んだにも関わらず、笑いが取れずショックを受けて帰ったのを覚えています。先輩からは『そういう場ではありません。』の一言でした。

「自分たちでテーマを決めて、年間通じて実践し、それを福祉学会で発表する。その賞金でうまい物を食べに行こう。」なあって虫のいいことを考えてましたが、結局日々の事に追われてしまい、申し込むこともなく、終わってしまう、これが私の福祉学会です。

40年おめでとうございます、また賞金が付くようになったら出てみたいと思います。どうもすみません。

### ●学会との縁

福祉学会さんとはあまり縁がなく、というか避けていたのかもわかりませんが、過去一度、まだ賞金があったころ、甲賀郡の調整会議の一員として3分位だけしゃべった記憶があるくらいです。結果は記憶にございません。……飲みに行っていないので、ダメだったのでしょう。いや、よく飲みに行っていたので、その中に飲み込まれていたのかも。



### ●プロフィール

昭和58年～ (社福)しがらき会「信楽通勤寮」に入職  
平成7年～ 甲賀郡サービス調整会議参画  
平成11年～ 甲賀郡障がい者雇用支援センター開始  
平成16年～ (社福)さわらび福祉会へ 現在に至る

## 「ふれあいサロン」から得られる 高齢者の安全安心とQOL向上について

地域福祉活動ボランティア団体「鹿跳倶楽部(ししとびくらぶ)」事務局担当 岸本 弘己

老人会の解散後、所在無い高齢者が道端で世間話等で時間を費やしていた中から『皆で集まる場所を作って!』との要望が出て、「ふれあいサロン」活動が始動した。地域の有志と福祉の専門家で検討し、活動目標を『健康寿命を延ばし住み慣れた地域での生活を維持する。』と設定。高齢者が要介護になる三大原因\*1が、①脳血管疾患、②認知症、③身体機能低下であることから「認知症予防・症状改善」「身体機能強化」主体のプログラムを選択し、専門家を講師として2回/月のサロンを2015年度から開始した。今までのサロン活動で、介護予防体操の継続による歩行や体操動作の維持・改善、古タオルを縫製した雑巾を福祉施設へ届けて『私らでも未だお役に立てるんや。』という社会参加意識の芽生え等、高齢者のQOL\*2向上に貢献していると感じている。

近年の地球温暖化による自然災害の多発・甚大化で多くの生命財産が失われ、特に高齢の被害者が多い。サロン参加の独居女性や老々介護者からの『台風の夜が怖い。』との声から、高齢者の安全安心の為に自治会館や福祉避難所(介護老人福祉施設)への自主避難行動を実施してきた。

第33回・第35回の滋賀県社会福祉学会に於いてサロン活動の事例発表機会を頂き、奨励賞を受賞した。その後、大

津市社会福祉協議会や来県された「軽井沢町民生福祉委員協議会」「亀山市民生委員児童委員協議会」等の研修会においても事例発表の機会を頂き、質疑応答で『事業ストーリーを作り“Plan-Do-Check-Action”を回す活動は企業のようなですね。』『高齢者が古タオル雑巾を縫って福祉施設に寄付して“自分達にも出来ることがある”と認識されたことは良いことですね。』等の批評を頂いた。

地域の絆を醸成するサロン活動は、参加者のQOL向上だけでなく、定期的に見守ることで心身の変化(要介護の芽生え)を捉え、又、台風接近等の緊急事態にはタイムラインに沿って避難行動要支援者を早めに自主避難させる行動を容易にしている。こうした活動は、「忘己利他」を実践するスタッフと各界専門家の講師陣のご尽力、及び、介護老人福祉施設リバプールや地域の介護事業所のご支援で継続できており、深く感謝している。

\*1:「厚生労働省・国民生活基礎調査」参照。

\*2:Quality of Life (人間の質・生活の質/生きていく満足度指数)

### ●学会との縁

①第33回 滋賀県社会福祉学会「奨励賞」受賞(共同研究者)

テーマ:地域自主防災会と福祉避難所としての連携活動の実践

②第35回 滋賀県社会福祉学会「奨励賞」受賞(発表者)

テーマ:「地域住民主体のサロン」活動の今後の運営の在り方と継続について



▲介護予防体操講座



▲臨床美術講座



### ●プロフィール

家電メーカー定年退職後、民生委員児童委員を2期務め、2014年に地域での『ふれあいサロン』開催を企画し、2015年度より活動を開始し継続中。その他、滋賀県地球温暖化防止活動推進員、うちエコ診断士、防災士の有資格者として活動中。

# 誰もが必要とされていることを実感できる社会をめざして

社会福祉法人さわらび福祉会 甲賀・湖南ひきこもり支援『奏-かなで-』 主任相談支援員 北出 篤嗣

甲賀・湖南ひきこもり支援『奏-かなで-』(以下、『奏』)では、ひきこもりがちな生活を送る人やその家族に、現行の福祉サービスでは届けられない支援を届ける活動をしています。

「ひきこもり」は昨今、深刻な社会問題としてメディア等ではしばしば取り沙汰されています。しかし、ひきこもっていること自体は、あくまでも生活形態の一つであり、何ら非難されるものではありません。問題なのは、彼・彼女たちがひきこもり生活を送らざるを得なかった背景にあるのだと、『奏』では考えています。学校に馴染めなかった、酷いいじめに遭った、会社に適応できなかったなど、対人関係や社会的集団での傷つき体験によって、彼・彼女たちは「他者(社会)との接点を遮断することで自尊心や命を守る」という選択をせざるを得なかったのです。しかし、ひきこもりがちな生活そのものが、更なる自己肯定感の低下を招いていることを、『奏』では目の当たりにしています。

## 【人生の醍醐味ないから粗大ゴミ】

これは、20代の青年が書いた川柳です。また、50代男性は、【ひきこもりは社会にとって不要な存在。だから、テレビやネットで攻撃される】と話します。自らを「ゴミ」「不要な存在」と言わざるを得ない彼・彼女たちが、顔を上げて人前に

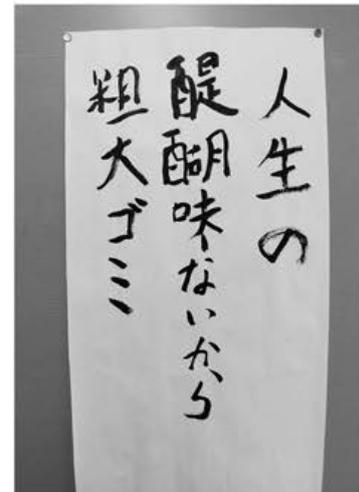
出ることには大きな壁が立ちはだかります。

では、彼・彼女たちは他者と関わることを心底拒否しているのかというと、むしろそういった人は少ないように思えます。彼・彼女たちは、他者との交流を遮断しているがゆえに、他者と出会うことの大切さを深く理解しているように感じることも、何度もありました。ブラックバスを釣った喜びを他者と分かち合える、自分の描いた絵がまちづくりセンターに飾られる、ホリデースクールの子どもから「ありがとう」と言われる。このような一つひとつの体験が、彼・彼女たちの傷ついた自己肯定感を回復させる道程なのです。それと同時に、彼・彼女たちが一歩踏み出すには、周囲の誰かを笑顔に変える体験が必要なのだと思います。

問題は働いていないことでも、ひきこもっていることでもありません。人は誰からも関心を持たれず、孤立した時、日々報道されるような、より深刻な事態に陥ることがあるのだと思います。一人ひとりの存在は、他の誰かを温かな気持ちにする力をもっていることを、彼・彼女たちから教えられています。

## ●学会との縁

- 滋賀県社会福祉協議会(滋賀の縁創造実践センター)と協働のもと、2015年から、ひきこもり支援を実施。
- 第37回・第38回の学会において、実践内容を研究発表。
- 第38回では、『ひきこもりがちな人の支援を通じて生まれた、地域住民との新しい出会い』について研究発表し、奨励賞を受賞。
- 第39回、「滋賀の“縁”」認証を受ける。



## ●プロフィール

- 2006年、社会福祉法人さわらび福祉会に入職。
- 2015年、甲賀・湖南ひきこもり支援『奏-かなで-』に、専属相談支援員として配属される。
- 2019年、支援センターこのゆびとまれに配属され、現在に至るまでひきこもり支援を担っている。

## Research must go on (研究は続けなければならない)

岡山県立大学保健福祉学部 現代福祉学科 准教授 口村 淳

第27回の当学会で「併設型ショートステイにおける相談員業務の特徴 ―諸記録の内容分析を通して―」というテーマで発表した時、学会奨励賞をいただくことができました。そのことが本当に嬉しく、目を閉じれば今でも思い出せるくらいです。大学生の頃から、当学会のことは知っていて、実際に参加もしていました。「自分もいつかはここで発表できるようになりたい」と憧れたものです。

「学会との縁」でも書かせていただきましたが、学会発表が過去4回、学会誌『滋賀社会福祉研究』の掲載が過去6回と、ささやかですが、自分が歩んできた実践の「足跡」をのこすことができました。また2019年からは分科会の座長や学会誌の査読・編集という、今度は発表者(投稿者)を支える立場で関わらせていただきました。島田司巳先生(むれやま荘)や安田誠人先生(大谷大学)といった著名な方々と一緒に編集作業に携われたのは、貴重な経験でした。

現在の私は駆け出しの研究者ですが、この学会に育てられ、鍛えられたからこそ、今の自分があると思っています。感謝の気持ちで一杯です。

2019年に他界されたジャーニー喜多川さん(ジャーニーズ事務所創業者)の座右の銘は「Show must go on(ショーは続けなければならない)」だったそうです。何があっても(創業

者の葬儀に参列するよりも)、お客様のためのショーを優先しなさいという教えです。

実践者にとって研究は、サービスの質を向上させるため、また自らの実践を評価する(振り返る)意味でも、欠かすことはできないものです。研究なき実践は、独りよがりになりやすいともいえるでしょう。コロナ禍のような「非常時」であっても、研究を継続することは可能です。たとえば「非常時」における実践(取り組み)をまとめ公表すれば、同じような立場に置かれた他の実践者に貴重な示唆を与えることとなります。Research must go on(研究は続けなければならない)です。

実践者を温かく見守り、そして背中を押し、時には諫めることもできる当学会は、滋賀の福祉関係者の「心の故郷」のような存在といえます。これからも、当学会のますますの発展を祈念しています。今は故郷から離れた地にいますが、また何らかの形でお役に立てる機会に備えて、Research must go on のスピリットを持ち続けたいと思います。

### ●学会との縁

実践者として過去4回(第27回、29回、30回、35回)学会発表の機会を得ました。2009年(第27回)には学会奨励賞をいただきました。学会誌『滋賀社会福祉研究』には過去6回(第4号、5号、7号、12号、21号、23号)、実践報告や論文、書評などが掲載されました。2019年から2021年まで、学会分科会の座長、学会誌の査読・編集委員として関わらせていただきました。



### ●プロフィール

1996年より特別養護老人ホーム淡海荘に勤務し、特養、ショートステイ、デイサービスの生活相談員を経て介護課長として従事。その傍ら同志社大学社会学部嘱託講師を歴任。2019年から2021年まで滋賀県介護福祉士会 会長として活動。2021年10月より現職。

主な著書「高齢者ショートステイにおけるレジデンシャル・ソーシャルワーク」(単著、法律文化社)、『『また利用したい』と言わせるショートステイ相談援助・運営管理』(単著、日総研出版)、『利益を生み出す相談員の段取りと実践』(単著、日総研出版)他

# 15秒のコメントに支えられた22年

医療法人白櫻会 小金沢歯科診療所 理事長 小金澤 一美

滋賀県社会福祉学会40回おめでとうございます。

私は、もともと福祉に直接関わることはないと思っていた歯科医師です。大学病院にいた頃は、患者さん一人ひとりの生活に目を向けるのは例外的なことでした。

1992年のある日、以前に義歯を作った患者さんの家族が診療所に来られたので、「おじいさんの入れ歯の調子どうですか?」と聞くと、「おじいさんは、脳卒中の後遺症で歩けず、通院できず、義歯も使えないのでちゃんと食べられない」とのこと。私の作った義歯で栄養が摂れないのなら、栄養をとる方法を考えるのも私の仕事だと思い、往診することにしました。

その後、歯科訪問診療という制度ができ、患者さんの生活を見る機会が増え、歯科の視点から支援できることがたくさんあるのに気付きました。

しかし、当時の在宅療養では、歯科の在宅診療や口腔ケアには関心を示してもらえず、褥瘡や肺炎への対応で精いっぱいのような状態でした。

医療関連の学会で在宅歯科診療をテーマに発表をしても「変わったことをしているね。」と、理解してもらえませんでした。

そこで、福祉関連の学会に関心を持ってもらえないかと、1999年第17回の滋賀県社会福祉学会で、『訪問歯科診療の現況』を口述で、『要介護高齢者における口腔ケアの必要

性』をポスターで発表させていただきました。

発表後、「訪問歯科診療は大切ですね。これからもっと必要になりますから、頑張ってください。」と、コメントをいただきました。

この時、私達の活動が世の中に認められたように見え、大変嬉しく、ありがたかったことを今でも思い出します。

また、「これから必要になります」というコメントは、以後、在宅診療で出会った患者さん達に「あったらいいなあ」と思った支援やサービス、施設を企画する際の支えになりました。

22年が経過して、歯科診療所は5拠点12事業所で医療介護福祉の活動ができるようになり、特に2021年に開設した事業所は児童福祉分野で、やっと福祉にたどりつきました。

私達が研鑽してきた知識や技術を使わせていただくことが、誰かが生きることの支えになり、誰かの生活が少し楽になる。さらに誰かが自分の力で解決することで自信や幸せを感じ、「自分の価値を自分で感じてもらう」ために伴走することが私達の目的になりました。

認めてくれる人が少なかった当時、私達の目指すものは「間違っていない」と言っていたいただいた滋賀県社会福祉学会に心より感謝し、益々のご発展を祈念いたします。

## ●学会との縁

1999年 第17回「当院における訪問歯科診療の現況」口述発表

2007年 第25回「デイサービスセンターにおける口腔機能向上メニューへの取り組み」口述発表

2012年 第31回「2012年8月集中豪雨被災経験をいかした災害時の地域事業所間ネットワークの構築について」口述発表で奨励賞をいただきました。

他にも、小規模多機能や認知症の人と歯科治療などの報告もさせていただきました。



## ●プロフィール

(医)白櫻会小金沢歯科診療所理事長

日本老年歯科医学会指導医・日本口腔ケア学会評議員・滋賀県保険医協会理事・滋賀県歯科医師会会員

日本音楽療法センター会長

歯科医師・介護支援専門員・認知症介護指導者・介護予防運動訓練指導員

福岡歯科大学卒業。京都大学・福井医科大学口腔外科で文部教官。

1986年に大津市で開業。

1992年より在宅歯科診療、摂食嚥下と食支援に関わる。

現在、歯科診療所と小規模多機能・複合型サービス・グループホーム・デイサービス・訪問看護ステーション・居宅介護支援・サービス付き高齢者向け住宅・放課後デイサービスの代表。



## 推進委員としての滋賀県社会福祉学会との縁

社会福祉法人甲賀学園 鹿深の家 自立支援課長 堺 稔

滋賀県社会福祉学会40回おめでとうございます。

私が社会福祉学会の推進委員としての役割を頂いたのは平成24年の第31回からとなり、40回記念学会で自身も10年目を迎えることとなります。

初めて推進委員として参加させていただいたときから、自分自身が社会福祉学会推進委員として参加する上でのテーマは二点あると思います。推進委員の役割を引受けさせていただきました。一つは私自身が児童養護施設で働く職員として、児童福祉の現場のニーズ・現状を発信すること。もう一つは児童福祉の分野だけではなく、福祉全般の流れや他分野の最新の知見に触れる良い機会であり、それを児童福祉の分野に還元できればと思っています。

実際に推進委員として参加した私が一番に感じたのは、普段自分たちが所属する児童福祉分野がいかに狭い世界での福祉現場であったかということにまず直面しました。ご存じかも知れませんが、滋賀県には児童養護施設は4か所で、これは全国的にみても非常に少ない設置数です。普段狭い世界での福祉の考え方が、福祉学会に携わることで、シンポジウムなどを通して高齢者福祉、障害者福祉、地域福祉など多岐にわたる福祉の考え方に触れる事ができ、多くの気づきを得る機会を頂くことができました。第38回社会福祉学会全体会のテーマでもあった地域共生社会はまさに

### ●学会との縁

滋賀県社会福祉学会との縁は、鹿深の家児童指導員として平成15年に自由研究発表を行ったことが始まりです。その後平成24年からは滋賀県入所児童福祉施設協議会調査研究部会としての自由研究発表を毎年発表者か共同研究者としての参加と、同じく平成24年から推進委員として学会の当日運営スタッフとして参加させていただいています。

その最たるもので、児童福祉分野では、普段馴染みのないワードでした。しかし、児童養護施設を退所していく若者たちにとっても非常に大切な視点であることに気づききっかけにもなり、生きづらさを抱えた若者たちがどのように地域社会で暮らしていくのかを考えるヒントを得ることができたなと思っています。

これらのように推進委員としての参加は、私自身にとっても有意義なものでありますが、もう一つのテーマでもある、児童福祉にスポットライトがなかなか当たらない現状があるという事も認識しています。今後は自身も発信者の一人として、社会に児童福祉現場の実情や、生きづらさを抱えた若者支援の必要性について発信していければと思っています。

今後ますます滋賀県社会福祉学会が滋賀県のみならず多くの福祉従事者に気づきや学びを得る機会となることを祈念いたします。



### ●プロフィール

平成14年から児童養護施設鹿深の家で児童指導員として勤務。施設では、主に児童の自立支援や保護者支援などの施設内SV役を担っている。平成24年から滋賀県児童福祉入所施設協議会調査研究部会に所属し、滋賀県社会福祉学会自由研究発表に発表者、共同研究者として参加している。



## 伝えたい実践ができた時に、学会で。

彩社会福祉士事務所 代表 坂本 彩

「これは、伝えたい!」

そう思えるような実践ができた時、私は滋賀県社会福祉学会のことを思い出し、「まだ、間に合うかな?」と慌ててホームページを調べ始めます。

第27回に奨励賞をいただいたテーマは、「自分たちの職場を『かえよう作ろうプロジェクト(かえつくP)』の実践」というものでした。自分が管理職をしていた部署で4人から退職届を出されるという状況にあった私が、そこから「職場づくり」に職員とともに取り組んだ経過を発表したものです。発表の場があったことで、自分が何をどう思って取り組んできたのかをまとめ、振り返ることができました。このことは今でも、チームで仕事をしていく中で私の糧になっています。そして、ありがたいことに、10年を過ぎた今でもこのことをテーマに福祉職場の研修講師として声をかけていただいています。

第32回に奨励賞をいただいたテーマは、「長生きしたい人生～糸賀園長とともに近江学園で暮らした僕の今～」というテーマで、知的障害のある当事者の方と一緒に発表をさせていただきました。糸賀先生がご存命だったころの近江学園で生活していた彼が63歳になっておられ、その歴史を

振り返るために、近江学園と一緒に訪問し、当時の記録を見せていただきました。彼の人生とともに、滋賀の障害福祉を振り返り、いま私たち実践者に何が引き継がれ、本人さんたちがどのように生きているのか、ということ「伝えたい!」と思い、発表させていただきました。発表から7年がたちますが、70歳を越えた彼と一緒に、今でも年に2～3回は障害者施設の職員研修で発表をさせていただいています。このことをきっかけに、「障害のある当事者の方と一緒に研究発表や研修講師をする」という私のスタイルが出来上がっていったように思います。

そして、それが、第37回に奨励賞をいただいた「大津市障害者自立支援協議会における圏域内合同新人研修の取組み―当事者を講師に招いて、本人主体を学ぶ―」につながります。大津圏域の障害福祉関係職員の合同研修に精神障害・知的障害・身体障害の当事者の方に講師をお願いし、一緒に新人研修を作り上げた経過と、参加者アンケートでの評価を発表しました。

私にとって、滋賀県社会福祉学会は、実践をがんばっている仲間に出会い、元気をもらい、次の実践を生み出す場になっています。

### ●学会との縁

「こんなにたくさんの方がソーシャルワークをがんばっている!」と励まされる場所です。



### ●プロフィール

主に、知的障害のある人とかかわる仕事を25年ほどしています。2017年に、独立型社会福祉士事務所を開業。福祉施設のアドバイザーや研修講師、成年後見人の受任、大学等の非常勤講師などを行っている(障害児支援論担当)。障害のある人もない人も一緒に「学び合いの空間づくり」をしていきたい。社会福祉士、介護福祉士、障害者相談支援専門員、漢方養生士指導士、漢方スタイリスト、薬膳アドバイザーの資格も持つ。



## 福祉学会発表とともに成長してきたNPO法人夢の学習 ～次年度に向けた活動計画の指針として～

### 特定非営利活動法人地域で創る土曜日夢の学習

### 摺本 圭治

滋賀県社会福祉学会との関わりは、6年前の平成28年度に甲賀市社会福祉協議会からの紹介で実践を報告させていただいたのがきっかけでした。

貧困・生活困窮家庭の教育格差をなくすために立ち上げた夢の学習は、土曜日を中心に参加・材料費無償の学習教室を45種、50名のボランティアにより年間280回開催することが出来ました。

そして、活動を通して得た身近な地域課題に対して向き合うことができ、家庭教育や子育て支援、更に高齢者の居場所についての実践を進めることができました。

学会で実践発表は、私たちの実践の礎を築いてきたものと思っています。有難いことに、平成28年度の発表で研究奨励賞をいただき、当時約100人のボランティアの士気を高めることになりました。

学会で報告させていただく度に、次の課題を見つけ様々な実践を積み重ねていくことができたのでした。

現在600名を超えるボランティアの皆さんによる年間1500回を超える学習教室を、無償で提供できるまでに成長することができました。

奨励賞をいただいてからの6年間の継続は、現在も生き

ています。コミュニティーチャート(日々変遷する地域情報)がそれです。今年できた、令和2年度までの学習教室一覧冊子には240の教室が掲載され、郷土料理集や簡単朝食レシピ集の発刊、さらに、コロナ禍での8000枚のマスクや6000セットの学習キット作りができました。時々の必要に応じた実践です。

今年から取り組んでいる「ゆめのHEYA」構想は、学会や様々なところで耳にした糸賀一雄氏の「自覚者が責任者」の言葉からアイデアをいただきました。

- ①不登校など自らの課題解決に向かうHEYA、
- ②地域で感じた課題解決に向かうとするHEYA、
- ③研究や調査をしていこうとするHEYA、がそれです。

自主的・主体的に取り組んでいく地域住民の育成です。

夢の学習の目的である生涯学習社会、共生社会の実現に向かっていく実感は、今年度を含め、これまでに発表させていただいてきた11本の実践発表によって得られてきたと思っています。

最後に、このような記念すべき日に報告の機会を与えていただきましたことに、スタッフ一同心より感謝いたしております。

#### ●学会との縁

平成28年に甲賀市社会福祉協議会からの紹介で、初めて参加させていただきました。令和3年度で、6年連続11回の実践報告させていただくことになりました。その間、奨励賞を2回いただき、社会福祉協議会からも様々な助成金の紹介などをさせていただき、活動を支えていただくきっかけにもなってきました。

コロナ禍の為それぞれの地域▶  
(水口その他、土山・甲賀・甲南・信楽)で実施しました。



#### ●プロフィール

市内小学校を定年退職後、甲賀市教育委員会社会教育課に勤務。社会教育課に2年半勤めた後、平成28年に夢の学習を設立。平成29年NPO法人の認定を受け、平成30年に甲賀市夢の学習事業の委託を受ける。また、その間2期6年民生委員・児童委員を務める。

令和3年生涯学習コーディネーター資格取得。現在、夢の学習理事長。

# 学会発表をする目的と今後の自分の役割

社会福祉法人甲南会 特別養護老人ホームせせらぎ苑 介護職

坪川 拓己

## 〈滋賀県社会福祉学会との出会い〉

「坪川君一度、この件を学会で発表してみる？」私の学会発表のきっかけは上司からの一言でした。学会なんて……。学会で発表して何になるんだろう？と私は思った。

しかし、学会の抄録を上司に教えられながら作成した。当時は20代だった私は、がむしやらだった。言い方を変えれば自分のケアに自信がなかったのかもしれない。抄録の作成、資料作り、発表のパワーポイント作り、発表原稿、発表の練習、徹夜になることもあった。いざ学会へ……。前日の夜は寝られなかった。

発表が終わると、ようやくホッとする時間。終わった……。そして翌日また忙しい現場のケアへ戻る。。

## 〈学会発表の目的とは？〉

私は定期的にいろいろな学会での発表に参加してきた。それはなぜなのか？一番の理由は現場で行っていることをまとめることで、日々ケアの実践をしているケアスタッフが自信を持ってケアを行ってほしいとの理由である。

ケアの現場では忙しくバタバタ走り回っている中で、今やっているケアが正しいのか？振り返る時間が少ない。日々行っているケアを一つ取り出してまとめてみると、私たちが当たり前に行っていたことが、実はケアでとても大切だったことに気づくことが多々ある。学会で発表することで他の専

門職から評価をいただいたりすることを現場スタッフに伝える。そしてまた現場でのモチベーションアップにもつなげていく。そのようなことを考えながら学会発表に挑んできた。

また最初は先輩と一緒にまとめていた学会発表だったが、5年ほどたってからは私が先輩として後輩と一緒に学会発表をまとめていた。それは、先輩が私にして頂いたことを私が引き継ぎ、後輩とそのまとめを一緒にすることでお互いが学びあえることを大切にしていたからである。

## 〈学会発表でまとめるうちに大切なことに気づく……〉

学会発表の準備を何度もしていくうちに、実践でやっていることをまとめる力が養われた。そして、実践を理論的につなげてまとめることが大切であることに気づいた。現場では“うまくいったケア”についてケアスタッフは経験があると思う。しかし、なぜそのケアがうまくいったのか？なかなか言葉で表現するのが難しいことがある。

ケアの現場で誰もが経験している暗黙知の領域のケアで、成功体験をいかに言語化していくか、それを積み重ねていくことがケアの質を上げていくことではないかと感じている。現場でケアをしている限り、歴史ある滋賀県社会福祉学会に参加させていただき、ケアの在り方、課題など発信していきたいと思います。

## ●学会との縁

初めて学会での口述発表をしたのが滋賀県社会福祉学会でした。約20年程前のことです。当時ケアの現場の上司に誘われて行きました。

その後、全国グループホーム大会や認知症ケア学会での口述発表などに参加させていただきました。しかし定期的に滋賀県社会福祉学会での発表に参加させていただいています。

この社会福祉学会は、自分にとってのケアの考え方を振り返ることであり、また日々のケアの実践をまとめる作業はケアに携わる者としてとても大切な事なのかもしれません。

そしてそれは、今後もケアの現場の中で変わらない「スタッフ・利用者・そして介護者家族に対してどのように支援していくのか？」を考えることなのかもしれません。



## ●プロフィール

介護福祉士の専門学校卒業後すぐに特別養護老人ホームせせらぎ苑に就職。介護職として働く。

その後10年特養で介護職として現場で働きその後、同法人のグループホームで10年そして現在は、同法人のデイサービスセンターで介護職として働いている。介護の現場で働かせていただいて24年目になる。

現在も現場で利用者へのケアを日々行っている。就職してから、社会福祉主事、介護支援専門員、認知症ケア上級専門士の資格を取得。



## ソーシャルワークにあこがれて

滋賀県地域養護推進協議会 事務局長/滋賀県スクールソーシャルワーカー

中島 円実

平成28年29年と、児童相談所(当時は中央子ども家庭相談センター)と私の所属していた大津市子ども家庭相談室とで共同研究したことを発表させていただきました。テーマは「子ども虐待対応における児童相談所と市の連携について～児相と市、共同調査のまとめ～」です。当時は(令和の今でもですが)全国的に、子ども虐待対応における児相と市の連携について、さかんにその必要性が叫ばれていました。なぜかと言うと、連携が難しいからです。連携どころか、犬猿の仲のような関係性になっている自治体もありました。なんでやろう?素朴に疑問でした。そこで、調査をすることにしました。連携が難しい児相と市が、共同で協力して調査分析し発表する…それは素敵な一歩になるだろうと思いました。

調査は、それぞれのワーカーにアンケートと聞き取りをしました。そこから見えてきたものは、「それぞれの仕事やそれに向き合う気持ちなどについて、お互い知っているつもりだが、知らなかった。このことがよりよい連携を阻害している」というものでした。このことは、子ども虐待の現場だけではなく、多くの福祉現場にも当てはまります。

どんな仕事でもそうですが、特に福祉の仕事では連携が大事です。連携、つながること、一緒に同じ目的に向かって協

力しあうこと。それには相手の仕事内容や思いを理解し、尊重し、それぞれの強みをいかして協働することです。言うは易しですが、これが難しい。まずは「相手のことを知らない」ということを知ること。私たちソーシャルワーカーは、こうした関係機関への働きかけも重要な役割です。時に、目に見えにくい水面下の動きや、業務に関係のないようなことが、実は後で効いてくる。様々な職種のことや制度を常に学び、客観的に時代を読み、人脈を広げ、足も頭もツールも目いっぱい使い、地道にこつこつ…目立たない縁の下の力持ちだけれど、それがソーシャルワークの醍醐味です。

あなたの仕事は?と聞かれたら「ソーシャルワーカーです」と胸をはって答えたい。私にとってソーシャルワーカーは最高にカッコいい仕事なのです。そうした見えない仕事も、その実践を世に発表していく事で可視化し、後進を育てます。滋賀県社会福祉学会では、今後も多くの福祉人の成長を見守り、支えてほしいと思います。

### ●学会との縁

1998年前後(記憶があいまいで…)、滋賀県社協の『滋賀の福祉130人会議』という事業に参加しました。当時は福祉を学び始めたばかりの頃でわけもわからず、でもその爆発的に面白い活動は、今の私の在りようを決める大きな原点の一つになっています。そうした事から私にとって滋賀県社協はずっとエモーショナルな存在です。滋賀県社会福祉学会は福祉の現場に関わる人々が、日頃の実践から紡ぎあげ築き上げたものを発表する場でもあり、自分も発表したい!と思ったときに自然に学会に申し込みをしていました。



### ●プロフィール

社会福祉士・精神保健福祉士。大津市生まれ大津市育ち、両親も大津出身、生粋の大津っ子です。平成15年度滋賀県こころんだいやる、平成16年度から大津市子ども家庭相談室、そして令和3年度から現職です。自分の子育て経験から児童福祉を学び、あとは一直線に走り続けてきました。年齢を重ねるごとに「児童福祉は地域福祉」という思いが強くなりました。生まれ育った滋賀県のために、みなさんと協力して、何ができるか継続して考え、実践していきたいと思っています。

# 20年間の福祉と地域との歩みから見えてきたもの

特定非営利活動法人宅老所心 事務局長 中瀬 隆泰

私が『福祉』と呼ばれる世界に入ったのは、草津市役所に在職中の平成11年に人事異動により高齢者福祉の部署に配属されたときでした。この年は翌年4月より始まる介護保険制度の準備で、福祉のことが何も分からない状況で、慌ただしく毎日を過ごしていた日々を思い出します。

それから20年以上の月日が経ちました。その間に人口減少や少子高齢化などにより、家庭や地域の課題も大きく様変わりしました。一番感じるのは、以前は潜在化していた課題が吹き出すように顕在化してきて山積してきたこと、そして課題の複雑化・多様化です。介護の問題で関わっても生活困窮や家族の障がいや引きこもりなどの問題が同時多発的に起こっていて、複数の支援機関の連携も日常的です。

そのような中、私が前職から現在の宅老所心に移り感じたのは地域との距離感の差です。市役所時代もできるだけ地域との距離感を大切にしてきましたが、その差は歴然でした。地域住民のみなさんと一緒に地域づくりができるのは大きな醍醐味です。

地域の中では課題を「しなければならぬ」という考えになるとうまくはいきません。「あったらいいよね」という考え方

で物事をつくり進める方が、取り組みやすく継続性も上がることを学びました。宅老所心では、この「あったらいいよね」の考えに添って地域居酒屋やランチ、助け合いを行い、その後子ども食堂などもしてきました。

これまで福祉は高齢者や子ども・障がい者など、ごく一部の人の問題とされてきましたが、現在では地域全体の課題となっています。そして行政だけで解決できる状況でもなくなりました。自分たちの地域は自分たちでつくっていくという意識のもと、今だからこそ人と人のつながりが、改めて必要な時代になっています。私が所属するNPO法人や社会福祉法人は、行政と地域の架け橋的な位置づけとして、様々な発信や新たな取り組みにチャレンジし続けて、これからの時代に必要な姿を発掘し地域とともに歩いていく役割があると考えています。

現状に立ち止まらず、楽しいことを見つけながらも、生きづらさを抱える人たちの課題を解決していく。それが私の考えるこれからの福祉のあり方です。

## ●学会との縁

第39回滋賀県社会福祉学会

「地域で共に暮らす人々がつながり合う地域社会の構築  
～かやぶき心における居場所づくりを通して～」を発表し、  
奨励賞を受賞



## ●プロフィール

平成2年4月 草津市役所入職  
(福祉関連部署に12年間在籍)  
平成28年3月 草津市役所退職  
平成28年4月 特定非営利活動法人 宅老所心入職

## 研究における様々な視点・多職種共同の重要性

社会福祉法人青祥会 介護老人保健施設長浜メディケアセンター サブリーダー介護職員 西崎 清隆

第39回滋賀県社会福祉学会研究発表大会に参加し、眠りスキャンという睡眠・覚醒・バイタルなどを計測する非装着型のセンサーの導入により見えてきた、利用者の睡眠と排泄との関係性について発表をさせて頂きました。眠りスキャンを導入した当時は、職員の介護負担の軽減を目的とした離床センサーのような活用法しかできていませんでしたが、利用者の睡眠状況の改善と職員の更なる介護負担の軽減を目的として多職種でカンファレンスを行い、眠りスキャンのデータから睡眠と覚醒・排泄・ケアのタイミングなどを分析することにより、対応策を考えケアを見直すことにしました。思ったような結果が現れないこともあり、何度も多職種でカンファレンスを実施し、様々な視点から利用者へのアプローチを行いました。睡眠効率に上昇がみられた事例を評価することで、睡眠を妨げる原因の一つとして排泄の問題が大きく関係していることを裏付けることができ、その結果、根拠のあるケアに繋げることができました。

今回の研究により利用者の排泄の問題が改善されることで十分な睡眠がとれるようになり、日中の活動に意欲的に参加できるようになったことで利用者のQOLの向上に繋がったと共に、職員にとっても夜間の巡回の回数が減ったなどの業務負担の軽減ができたため、利用者だけでなく職員にもメ

リットがあったと本研究に対する意義を感じています。本研究を通して多職種共同で同じ方向に向かって取り組むことの重要性や、それぞれの専門性を生かして様々な視点から利用者のアセスメントを行うことで問題改善への糸口が見えてくることを学び、自分自身の成長にも繋がったと思います。

今回の研究発表大会に参加・発表の機会を頂き、奨励賞を受賞出来たことに喜びを感じています。今後、排泄以外に浅眠の原因がある利用者についても睡眠が改善できるようにデータを活用したり、在宅復帰のために家族の排泄に対する不安や介護負担の軽減が必要であるため、夜間頻尿の利用者には夜間の排泄回数を減らすための取り組みを多職種協同行い、データを活用しながら科学的根拠のあるケアをしていきたいと思っています。

研究結果を施設内でとどめておくのではなく、滋賀県社会福祉学会研究発表の場を借りて他事業所と共有することで、本研究から得られたことを他事業所でも参考の一つとして実践して頂ければ幸いです。それぞれの事業所が研究結果を共有し合い切磋琢磨していくことで多くの気づきや情報が得られ、県内の介護福祉施設の職員の資質やケアの向上に繋がるようにしていければと思います。

### ●学会との縁

第39回滋賀県社会福祉学会研究発表大会にて「眠りスキャン導入により見えたこと～睡眠と排泄の関係～」というテーマで奨励賞を受賞する。



### ●プロフィール

聖泉大学短期大学部介護福祉学科を卒業し、平成22年4月に社会福祉法人青祥会に就職する。現在勤続12年目になる。



# 社会的養護の現状を発信し続けることの意義

～滋賀県児童福祉入所施設協議会調査研究部会と福祉学会との深い関わり～

滋賀県児童福祉入所施設協議会

春田 真樹

滋賀県社会福祉学会40回、ならびに記念誌の発行につきまして、誠にありがとうございます。私自身も第15回学会(平成9年2月)に初めて実践発表して以来、様々な形で参加させていただき、40年の歩みの一部に関われたことを大変うれしく思います。

さて、私は今、滋賀県児童福祉入所施設協議会調査研究部会(以下「部会」)の担当理事として、社会的養護下で生活する子ども達やこれを支える職員達の現状について調査研究し、学会で報告し世の中に発信し続けることをミッションの一つとして捉え実行しております。

実は部会が学会に参画する遥か以前から、部会に所属する会員施設は積極的に報告発表しておりました。滋賀県社会福祉学会自由研究発表一覧を見ますと、第1回大会から積極的に参加し、その時の施設の実情や、これから必要になるであろうことについて、先見性を持った報告発表がなされていたことに気づきます。先輩たちが作り上げてきた伝統は、部会という形に姿を変えながら受け継がれ、そしてこれをさらに未来につなげていくことの重要性を痛感しているところです。

一方で、発表の数が年々減ってきていると推進委員から伺ったことがあります。自分たちの実践を世に問うことは、すなわち自らの取り組みの方向性を確認し、状況に応じて修正したりより力強く推進したりしていくことと同義であると考えています。そこで、部会の活動結果を今後も継続的に発表していきながら、児童福祉の業界全体が盛り上がっていくきっかけになればと強く願っています。また、こうした機会をこれからも担保し続けていくことが滋賀県社会福祉学会に求められているのではないかと思います。

今後ともますます滋賀県社会福祉学会が盛り上がっていくことを祈念いたします。



## ●学会との縁

私が鹿深の家に就職した時、施設内の研修体系の一つに“新人は滋賀県社会福祉学会に参加し発表を行わなければならない”というものがありました。それ以降、単独で発表したり共同研究者として参加したりするなど、多くの学びを得ることができました。この施設独自の研修体系は、時代の流れと共に、義務的研修から努力研修へと姿を変え、結果、施設として発表する機会がだんだんと減ってきたように思います。40回の節目を機に、施設全体でもっと参加しやすい形に整えていこうかなと考えています。



## ●プロフィール

平成8年4月に児童養護施設 鹿深の家に児童指導員として入職。平成20年に副施設長、平成30年から現職。令和3年7月から全国児童養護施設協議会養育に関する特別委員会副委員長。

平成24年度第38回資生堂児童福祉海外研修に参加。研修終了後、NPO STARSに所属。副事務局長。主に社会的養護下で暮らす児童の自立支援を担当し、セミナーの企画運営講師等として携わる。

滋賀県社会福祉学会には、第15回大会から参加。以降、発表および共同研究者として継続参加中。第26回大会において奨励賞受賞。



## 福祉研究が生み出す新たな実践

社会福祉法人幸寿会 特別養護老人ホームカーサ月の輪 施設長 日比 晴久

「福祉は実践してなんぼ!!自分たちは評論家になったらあかん!!」。いつの頃からか私は自分自身に言い聞かせるように一緒に働くメンバーにも伝えてきました。この考え方はこれからも変わることはありませんが、実践は自分(自分たち)だけが成し遂げれば良いものではありません。誰かのために行った支援は、きっと他の誰かにも必要なはず。支援を普遍化していくためには、何らかの形を残すことで次につなげていかなければなりません。そのことを強く意識するようになったのは、第34回滋賀県社会福祉学会において、「社会福祉施設を活用した支援を要する子どもの夜の居場所づくり～フリースペースの実践を通して～」を発表した時からです。

学会では、「フリースペースのつくり方」ではなく、「フリースペースがどうして必要なのか」について発表しましたが、短時間ですべてをお話することもできず、思いが伝わりきらなかったと感じていました。奨励賞を授与していただいたことで、発表内容が「滋賀県社会福祉研究(第19号)」に掲載されることになり、もう一度思いを伝えるチャンスが巡ってきました。文章化する際には、頭の中を整理し、最も伝えたいこ

とは何なのかを明確にしたことで、フリースペース事業そのものではなく、その先にある「社会福祉施設が地域の居場所をつくる意義」について、自らの考えをまとめることができました。

地域住民と一緒にその地域のニーズに合わせた支援を考え、特養の“機能”と“マンパワー”を活かした“居場所づくり”の実践を重ねていくことで、地域にとって身近で信頼される施設になっていく。一か所から始まったフリースペースは、高齢者福祉施設を中心にその後ゆっくりと県内に広がっていきました。学会での発表とその後の研究によって、いつでも原点に立ち返ることができたこと、支援者同士が思いを共有できたことがとても大きな力となりました。目の前の困っている一人を助けるためにという思いを持ち続けながら、一人の課題の背景にある地域の課題を常に意識する。コロナ禍であっても今の自分(自分たち)にできることは何かを考え、今後も新たな居場所づくりに挑戦していきます。

### ●学会との縁

2016(平成28)年に開催された、第34回滋賀県社会福祉学会において、「社会福祉施設を活用した支援を要する子どもの夜の居場所づくり～フリースペースの実践をとおして～」を滋賀の縁創造実践センター「居場所づくり」小委員会リーダーとして発表、奨励賞を受賞する。



### ●プロフィール

阪神淡路大震災がターニングポイントとなり、28歳で機械部品の営業職から特別養護老人ホームの介護職に転職。社会福祉法人幸寿会では単独型デイサービスとユニット型特養の開設に携わり、現在も特別養護老人ホームカーサ月の輪の施設長として勤務している。2014(平成26)年9月に設立された“滋賀の縁創造実践センター”では、設立当初より企画員「居場所づくり」小委員会リーダーとして活動、翌2015(平成27)年3月に過去に例の無い「特養を活用した子どもの夜の居場所“フリースペースカーサ”」をスタートさせる。社会福祉士。

# 障がい・病気のある子どもたちに 豊かな教育(社会教育)の保障をめざして

合同会社『World of Wing』放課後デイサービス 臨時スタッフ 藤方 公

大学生の頃から、滋賀県内で、教育委員会主催のジュニアリーダーキャンプの指導、子ども会等のクリスマス会や地蔵盆のゲーム指導をしていた。また、大学では、自閉症、聴覚障がいのある子ども達のキャンプ、クリスマス会の指導にも携わった。教員になってからも、レクリエーション活動を続けた。その中で、子どもの成長・発達のためには、3つの教育①家庭教育(家族と過ごす日常生活、しつけ、家族で遊ぶ等)②学校教育(学校での教育)③社会教育(家族、教員以外の人と過ごす教育(時間))が不可欠であると実感した。しかし、①家庭教育と②学校教育は、日本国憲法などで保障されているが③社会教育は、努力目標にとどまっている。

養護学校(知的)に在勤中に、障がいのある子どもたちの夏休みの社会教育の確保のために地域に働きかけて「サマーホリデー事業」「障がいのある子どもたちの交流事業」が実施されることになった。そこで、ボランティアを育成するために「ボランティア講座」を開き、学生、社会人を確保することができた。この活動については学会で奨励賞をいただいた。

次に、病弱養護学校へ異動した。2004年に大津市で開催された「全国病弱研究会滋賀大会」をきっかけに、滋賀県内に病気のある子ども達の関係者(親、教員、医師など)によるネットワークをつくる事を目的に『滋賀・病気のある子どもたちの支援ネットワーク』を結成した。

『滋賀・病気のある子どもたちの支援ネットワーク』では、2013年に滋賀県立小児保健医療センターにおいて、入院中の方を対象に、プロの似顔絵作家による似顔絵を描くことを病院側に提案し、実現することができた。退職後の2018年、2019年にはさらに4か所の病院で実施した。(現在、コロナのために実施できていないが、継続していく予定)

また、2008年9月より、『滋賀・病気のある子どもたちの支援ネットワーク』主催、公益財団法人滋賀県希望が丘文化公園共催で病気や障がいのある子どもたちの家族を対象にした「ふれあいキャンプ」を実施している。実施当初、参加家族は、3家族と10人程度だったが、年を重ねるごとにリピーターも増え、最近では、募集開始後すぐキャンセル待ちになる状況になっている。内容は、プロの音楽家(マリンバ奏者、ギターリスト)や大道芸人のパフォーマンス、ダチョウの目玉焼き、鮎のつかみ取り、炭火焼等、日頃、体験しにくい内容を取り入れた。ボランティアスタッフに学校教員、福祉施設職員、学生たちと様々な職種からの参加がある。参加者は、プログラムの内容だけでなくボランティアや他の家族との出会いがうれしいと感想に書かれている。昨年度今年度はコロナのため中止となったが、来年度は、実施する計画をすすめている。

## ●学会との縁

今まで、社会福祉学会冊子に4回掲載され、奨励賞もいただいた。



## ●プロフィール

1981年3月大阪教育大学教育学部聾学校教員養成課程 卒業

滋賀県立聾話学校教諭 6年間

滋賀県立三雲養護学校 14年間

滋賀県立北大津養護学校 1年間

滋賀県立守山養護学校 14年間

現在 放課後デイサービス『World of Wing』



## 滋賀県社会福祉学会のさらなる発展を目指して

大谷大学教育学部 教育学科 教授 安田 誠人

「滋賀県社会福祉学会40回」おめでとうございます。まだ社会福祉がずっと注目されていなかった頃から学会活動が継続しているのは本当に素晴らしく、また全国に自慢できる取り組みであると私は誇らしく思っております。

私自身は第25回頃から実行委員、分科会座長として関わらせていただいております。当時の実行委員長は鎌田昭次郎先生、実行委員には島田司巳先生、清水教恵先生、田中博一先生など錚々たる顔ぶれが揃っておられ、緊張すると同時に心が躍ったことはいまでも忘れられない感覚です。

また第31回大会では「当事者から見た地域福祉の実践“ふつうの暮らし”の実現に向けて」、第35回大会では「災害時に生き抜く力」のテーマでコーディネーターをさせていただいたことは本当に光栄でいい思い出です。緊張のあまり十分に役割を果たせなかったことは若干後悔もありますが、滋賀県の社会福祉実践者と同じ壇上でシンポジウムを行えたことはちょっとした誇りにつながっています。

私自身は地元の大学で知的障害のある子どもの教育を学ばせていただき、療育センターや知的障害児施設でボランティアをさせていただいたことが福祉業界で仕事を行う礎になっております。国立療養所鈴鹿病院では短い期間ではありましたが、重症心身障害のある子どもやデュシャンヌ型筋ジストロフィーの子どもたちや保護者の方々とかわる

ことができたことは今でもいい経験になっています。

また自分が影響を受けた言葉の一つに灰谷健次郎氏の「あなたの人生がかけがえのないように、この子の人生もまたかけがえがないんだよ(以下略)」(『太陽の子』)があります。知的障害、特に重度の知的障害があることもたちの場合にはどうしても人権が制限されがちになりますが、「人権を制限することは決してあってはならない」と心にとどめております。

決して学生時代成績が良かったわけではなかった自分を励まし、進学を進めていただき、さらには就職についても尽力していただいた恩師である、三重大学名誉教授の松坂清敏先生には心から感謝すると同時に、福祉実践者・教育者・研究者、そして人間として近づけるように、今できることを積み重ねていこうと思っております。

第40回記念大会まで実行委員、分科会座長を継続させていただいたことに心から感謝しております。そして滋賀県社会福祉学会が50回、そして100回と継続し、さらなる発展を遂げることを確信していることを伝えさせていただき、筆を置かせていただきたいと思います。

### ●学会との縁

第25回大会～

- ・滋賀県社会福祉学会 大会実行委員
- ・滋賀県社会福祉学会 分科会座長
- ・滋賀県社会福祉学会 学会奨励賞 選考委員

第31回大会・第35回大会

- ・全体会 コーディネーター

第9号～

- ・滋賀社会福祉研究 研究誌編集委員



### ●プロフィール

- ・三重大学大学院教育学研究科障害児教育専攻修士課程修了
- ・厚生省(現厚生労働省)厚生技官 国立療養所鈴鹿病院 児童指導員
- ・一宮女子短期大学(現修文大学短期大学部) 幼児教育学科 専任講師
- ・滋賀文化短期大学(現びわこ学院大学短期大学部) 人間福祉学科 専任講師・准教授
- ・びわこ学院大学教育福祉学部 准教授
- ・大谷大学短期大学部 幼児教育学科 教授
- ・大谷大学文学部 教育・心理学科 教授

# 私と学会の思い出

社会福祉法人大津市社会福祉協議会 事務局次長／相談支援課長 山口 浩次

第40回滋賀県社会福祉学会の記念冊子の発行、おめでとうございます。

私が、滋賀県社会福祉学会(以下「学会」と略す)に参画している思いや意義について、メッセージを書かせていただきます。

私は、大津市社会福祉協議会(以下「大津市社協」に略す)に入職して、2021年度で31年になります。新人の頃は、職場の先輩と20歳以上年齢が離れていたことや、人間関係に悩みながら、目の前の仕事に追われる毎日を過ごしていました。職場内のちょっとしたトラブルで、離職を考えたことがありました。

私の危機を救ってくれたのは、大津市社協の設立総会時に発起人の一員であった広瀬さん(ご住職)との出会いでした。私の悩みをじっくりと聞いてくれた広瀬さんは、「昭和27年の大津市社協の設立時は、行政以外の民間の福祉団体が出来たことに対して感動したんやで。大津市社協は全国の社協の縮図や。どこの職場にもいろいろあるやろう。山口君、大津市社協の実践で、滋賀県内の社協に良い影響を与えたらどうや。そして、近畿、日本の地域福祉の光になるような実践を大津でやって欲しい」と私の背中を押してくれました。

私は、聴いてもらったことで気持ちが楽になり、大津市社

協の実践で滋賀や近畿、日本を変えたらどうやの一言に、本当に光が見えたような気持ちになりました。

その後、学ぶ場を求めて、学会に参加しました。滋賀県内の先輩たちの報告する姿に感動し、仲間や利用者と一緒に困難を乗り越える実践に学び、研究者と協働する実践に触れて、目から鱗が落ちるようでした。当時の私は、学会に支えられました。

私は、学会の全体シンポジウムで2度も報告する機会を与えていただきました。また、学会発表は、5回チャレンジさせていただきました。奨励賞を頂いたときは、仲間と喜び合い、活動に弾みがつきました。学会のおかげで、日頃の実践を報告するチャンスをもらい、滋賀の福祉人の報告に何度も感動して、毎回元気をもらってきました。

現場の実践や人間関係には、悩みがつきものです。そうした時は、学ぶこと、そして、実践報告をする学会の場があることの有難さを経験しました。

今では、学会の推進委員として、準備の委員会や当日の座長等を担うことで、支える側の醍醐味を味わっています。今後も、滋賀の福祉人の希望となる学会を目指して、長く、楽しんで参画させていただきます。

## ●学会との縁

全体シンポジウム 2 回登壇。学会発表複数回、学会推進委員



## ●プロフィール

平成2年4月から、社会福祉法人大津市社会福祉協議会に勤務。  
市社協の様々な事業を担当してきた。現在、事務局次長。

## 地域回想法で、エンパワメントできる役割づくりを

市民活動 山内エコクラブ主宰/甲賀市役所 保健師 竜王 真紀

「昔はな、近所で水や力を分けあった。近所で順番に風呂の日を決めてみんなが入りに行く「もらい風呂」もした。みんなが寄ったら百姓や山仕事の話をするんや。」昔を懐かしみながら談笑するみなさん。

私が市民活動として関わる山内エコクラブは、子どもたちと一緒に地域の資源を可視化し、これを活かした地域づくりを進めようと、地域回想法を基本に高齢者からの聞き取りをしています。

子どもの時の家の手伝い、家には牛がいて大切にされたこと、近所同士のおすそわけ、助け合いの農耕、土葬の話、祭りの話・・・参加者の温かい雰囲気と昔懐かしい話に笑顔が絶えません。自然と体と心が動いているのがわかります。この何気ない会話の中には、「結い」や「普請」「お互いさん」といった村共同作業、「生かしてくれてありがとう」の感謝の気持ちが暮らしの中にありました。昔を語る古老たちは、自分たちも自然の一部であると自覚しながら、人間相互の連帯感などの文化を作ってきたのです。先人が築き上げた共生の知恵そのものです。

このような里山の文化を可視化しようと、山内6地区の「ふるさと絵屏風」づくりを進めてきました。民俗博物館学芸員らとの協働(博福連携)の機会を得て、完成した絵屏風を元に、

民具を用いたお出かけ回想法、ボランティアや施設職員向けの回想法研修会、小学校への出前講座、紙芝居制作支援、箱膳を復元した回想ツーリズム、DVD制作やYouTube発信を続けています。

語り部の言葉は躍動していて、地域への愛着や誇りも伝わってきます。高齢者の話を聞くことで、失われてしまった里山の暮らしが輝いていたことを知ります。一方、高齢者は、過去の出来事や出会った人々の姿、親しんできた歌や声・道具、懐かしいおやつや料理などを思い浮かべながら、「自分の人生もそんなに悪いもんやなかったわ」と振り返られる様子に、尊さと力強いエンパワメントを感じます。「最期にみんなとしゃべった時間が幸せだった。」と言葉を残し逝かれた語り部もおられます。

これからも高齢者への尊厳を大切にしながら、人生の集大成の時、自身が歩んだ生きざまに幸せを感じられる役割づくりを、お手伝いしていきたいと思っています。

※地域回想法：人の絆や思い出のあるなじみの地域で、昔を語り合いながら、人生の振り返りと再評価を行い、これからの生きる力に生かす支援方法で、介護予防、認知症ケア、世代間交流やまちづくりへの活用が期待されるものです。

### ●学会との縁

いろいろな職種の方が集まる辛辣かつ忌憚のない質問にとっても刺激を受けたのを覚えています。お世話になりました。

★市民活動 山内エコクラブで3回の発表、

「ソーシャルキャピタルの再生をめざす記憶文化財の役割と活用」2018

「地域資源である人材発掘と意義と活用～名人発掘事業を通して」2012

「高齢者の智恵と経験を活かした地域づくりをどう進めるか」2011

★市役所保健師として2回の発表

「コミュニティエンパワメントをめざした地域包括支援センターの役割」2011

奨励賞受賞 「高齢者ボランティア活動の継続に必要な要因分析と支援策の検討」2013



### ●プロフィール

市役所保健師として働く傍ら、2009年からライフワークとして市民と一緒に地域の宝探しと可視化活動に関わる。主な活動は、地域回想法を基本にした高齢者支援とESDをめざした子どもたちとの環境体験活動(野洲川探検隊)、地元の自治振興会活動である。関わる活動ごとに気まぐれに広報誌をつくるのが趣味でこれまでに100通以上作成している。また研究的な視点も大切にすべく公衆衛生学会、社会福祉学会などでの発表も定期的に行っている。

山内エコクラブホームページ リゅうちゃんのワイガヤ保健局

－ Ryuchan's Y-gaya hoken-kyoku (yamaeco.net)

## おわりに

私はこれまで7年間事務局として学会に関わらせていただきました。最初に担当をしたのは滋賀県社協に入職した年で、ちょうど糸賀一雄さんの生誕100年の年でした。まだ仕事のことも何もわからない状態で担当となり、上司や前担当に聞きながら、当時実行委員長をされていた田中博一先生に学会について教えていただき、企画の相談をさせていただいたのを覚えています。その年は糸賀さんの生誕100年の記念事業として学会のシンポジウムを開催することになり、それまで糸賀さんのことは大学の授業で習い、「障害福祉の父」と呼ばれる方が滋賀県の方なんてすごいなあ」くらいしか知らず、遠い人だと思っていたのですが、学会の企画を通して滋賀で実際に糸賀一雄さんとともに実践をされてきた方の話を聞く中で、とてもリアルに、この滋賀で実践をされてきた実践者であることを感じるようになりました。

糸賀さんの「自覚者が責任者である」「不断の研究」といった言葉が、第1回の滋賀県社会福祉学会から続いている自由研究発表につながるものだと教えていただきました。初めにこの社会福祉学会を担当したときに、長年担当してきた上司から、第1回からの学会の要旨集を見せていただきました。手書きで書かれているレジュメが残っており、先輩たちの実践研究が積み重なって今があること、自分が生まれるよりも以前から続いているこの学会を担当することに感動し、責任を実感したのを覚えています。

自由研究発表の発表者やシンポジウムの登壇者、学会の実行委員・推進委員のみなさんから、研究者だけでなく活動の実践者が研究発表をする垣根のない学会の意義を教えてくださいました。実践発表と研究発表の違いに悩むことや、シンポジウムの企画をどう進めていいのかわからず悩むことも多々ありましたが、この学会を担当できたことでの学びや、得たつながりは本当に大きなものだと感じています。

最後になりましたが、この「40回記念小冊子」の発行にあたりメッセージを執筆いただいたみなさまに感謝申し上げ、今後もこの滋賀県社会福祉学会が社会福祉の実践者のみなさまとともに発展していくことを願い、あとがきとさせていただきます。

## 私と滋賀県社会福祉学会

〈メモ代わりとしてもお使いください〉

### 滋賀県社会福祉学会事務局

滋賀の縁創造実践センター

滋賀県社会福祉協議会 地域福祉部門

〒525-0072 草津市笠山七丁目8番138号 県立長寿社会福祉センター内

電話：077-567-3924 FAX：077-567-5160

e-mail：shiga-gakkai@shigashakyo.jp



本冊子のPDFデータは  
ウェブサイトでも公開しています。  
<https://www.shigashakyo.jp/library/>

